

INTERVIEW

八戸市立市民病院 副院長・救命救急センター所長
今 明秀先生



【プロフィール】 今 明秀先生 青森県出身。1983年自治医科大学卒業。初期研修後、倉石診療所、大間病院などでへき地医療を5年、その後に外科医師を8年勤めた後、1998年日本医科大学救急医学教室に入局し、川口市立医療センター救命救急センターで重症救急に6年間携わる。2004年から八戸で、一流の救命救急センターを作る活動を開始。病院前現場出動からER、手術室、ICU、リハビリ、一般病棟まで受け持つ、新しい日本型救急システムを確立した。現在、八戸市立市民病院にて副院長、救命救急センター所長、臨床研修センター所長を務める。

八戸の救急が 「万能細胞医」を生む！

聞き手：山田隆司 地域医療研究所所長

救急医療とへき地医療は近い

山田隆司(聞き手) 今日は八戸市立市民病院に今 明秀先生をお訪ねしました。まずは先生のご経歴をお話いただけますか。

今 明秀 私は1983年に自治医科大学を卒業しました。青森県の6期生です。青森県立中央病院で2年間の臨床研修をしました。当時は外科志望でしたが、多くの卒業生と同様、内科、小児科、産婦人科など、

いろいろな科をローテーションしました。

卒後3年目には通常はへき地中核病院へ行くはずなのですが、青森県では同期3人のうち1人は診療所へ赴任しなければならない状況で、私が診療所に赴任することになりました。倉石村という人口4,000人の村で、12床の有床診療所です。なにせ未熟で、お年寄りを最初から診る、病歴を聴

きながら診療するという訓練はほとんど受けていなかったのでもう下手くそでした。見落としもしました。胃の透視で胃がんを見落とし、その患者さんがその年のうちに亡くなってしまったという苦い思い出もあります。

その後体調を崩し、その診療所は1年だけで、2年目は野辺地病院に変わりました。野辺地病院はいわゆるへき地中核病院で2年間外科の研修をしました。そのあとは八戸病院という30床くらいの小さい病院へ行きました。そこには3期卒業の岡本一雄先生がいました。

山田 その岡本先生が院長だったのですか。

今 そうです。岡本先生が院長で私が普通の医者という2人体制でしたが、初めて自治医大の卒業生と一緒に仕事をすることができました。とても居心地のいい環境で、また2年目には私の下に後輩医師がきたので、自治医大3人体制になりさらに楽しかったです。

それから県立中央病院に外科研修ということで行きました。1年だけでしたが、外傷や熱傷など、いわゆる一般的な消化器外科からは外れているようなものは全て私が受け持って、救急学会や外傷学会へ行く機会もいただきました。

山田 そこには救急部はなかったのですか。

今 当時、青森県に救急医はいなかったのです。救急医学というものの自体が曖昧で、独立した概念がなかった。もっとも私たちが自治医大在学中も救急はありませんでしたよね。今では「救急医学」という独立した学問、診療科、あるいは救命救急センターがあるのが日本でも当たり前ですが、はじめて救急医学会に行った時には「えっ？ こういう集団があるんだ！？」と驚きました。さらに外傷学会に行った時にはもっと驚きました。「えっ、外傷だけをやっている人たちがいるんだ！？」と。でもそれは外科の延長で、もしくはへき地でやってきた「何でも診る」延長に近いなと思いました。例えば、県立中央病院の循環器内科や消化器内科とへき地とはかけ離れているも

のがありますが、救急医学とへき地とは結構近いものがあります。ボリュームの問題と、重症度が違うだけ。そう思いました。

県立中央病院を終わった後、いよいよ力をつけた自分としては何かにチャレンジしてみたいと考え、三橋梅八先生が栃木に転勤されると交代で大間病院に入りました。

山田 それは義務が終わるころですか。

今 あと1年という時です。

三橋先生が敷いてくれた何でも診る大間病院。何でも診ていい大間病院。そのルールに基づいて何でもやりました。

山田 大間病院の規模はどのくらいですか。

今 病床数が約30床で、卒業生3人でした。そこで2年間過ごしました。本当はもっといる予定だったのですが、東京の多摩永山にできるエルスタ東京という救急救命士の養成所を自治医大が請け負うということで、私も誘われたのです。1週間のうちの半分をエルスタ東京で教える、残りの半分を日本医科大学多摩永山病院で研修するという条件で行くことにし、大間病院を2年で退職しました。

ところがエルスタ東京は卒業生6人ぐらいでスタートするはずだったのが、2~3人になってしまっていて、研修に行くのは不可能ですよということになったのです。研修が目的で行くのに養成所の教官だけというのは約束違反だということで、そこへ行くのはやめました。

それで行き場を失ってしまったのです。海外へでも行こうか…と考えていたところに野辺地病院の院長から「何をやっているんだ？」と電話がかかってきて「5月だけでもいいから手伝いに来なさい」と。では5月だけということで手伝いに行ったら、そこに5年間いることになりました。

山田 野辺地病院は、義務内で診療所の次に行った病院ですね。

今 そうです。以前働いていた時の指導医がそのままいましたのでいい関係でできましたし、外科の